

万次郎人生の概観⑭

「ホーツン事件」日本人が初めて外国人を逮捕

(1)捕鯨船「壹番丸」の兄島寄港

ホーツン事件とは、文久三年(1863)4月19日、万次郎が船長を勤める捕鯨船「壹番丸」が風力の関係から小笠原の父島へ帰港することができず、仕方なく兄島の滝之浦湾に寄港した。ちなみに小笠原諸島は北から、弟島・兄島・父島・母島と並び姉島と妹島・姪島がその南尾に位置している。

| 島名 | 東京からの距離 |
|-----|---------|
| 大島 | 108km |
| 三宅島 | 179km |
| 御蔵島 | 199km |
| 八丈島 | 287km |
| 青ヶ島 | 385km |
| 父島 | 984km |
| 母島 | 1033km |



(2)壹番丸の兄島寄港中に発生した強盗未遂事件 (=ホーツン事件)

兄島から父島は目と鼻の先である。万次郎は捕鯨経験のある父島在住の外国人6人に1泊の休暇を与えた。6人の中の1人に父島在住の外国人乗組員・ウィリアム＝スミスがいた。彼は日頃から勤務態度や素行が悪く、要注意人物であった。万次郎は給与を前払いしていることから、逃亡や船の備品を盗む恐れがあったため、スミス自身の荷物を船外に持ち出すことを固く禁じた。

仕方なくスミスは一旦自宅に帰り、同居人であったホーツンに自分の荷物を船外に持ち出すので加勢してくれと依頼した。手伝ってもらえれば謝金を支払うことを約束。そこでスミスとホーツンは事件を起こそうと壹番丸にボートで近づいた。船に移る際にホーツンは不覚にも実弾入りのピストルをボートに落とし、これを壹番丸乗員のジョン・ウィリアムに見咎められる。これが船長万次郎に報告され、二名は直ちに捕縛された。ピストル所持の他に船の備品を二人は持ち出していたことも発覚した。万次郎は二名を父島扇浦の役所に引き渡した(4月20日)。

万次郎は、父島扇浦役人たちと協力して犯人二名の状況証拠を固めた。外国人乗員からの供述を通訳し、英語と日本語で調書を記録した。

ここで二人の犯人について紹介しておきたい。主犯のスミスは、ロシア国籍の汽船「サントヨーシス号」の元乗組員で文久二年(1862)10月に二見港に寄港したときに脱走し、大

村に居住していた。共犯のホーツンは、1783年英国生まれの米国人であり、元ペリー艦隊のプリマスの水兵であり、1853年10月父島に寄港したときに除隊して父島に住みついた。事件当時、80歳の老人であった。

(3) 犯人二名を横浜米国領事館に連行

壹番丸は、文政三年(1863)5月1日、二人の犯人を乗せて父島を出港した。浦賀に着岸、幕府に顛末を報告し、再び海路で横浜に。5月11日横浜の米国領事館に犯人二名を預けた。本来ならば日本領土内での犯罪なので日本側に裁判権があり、日本がこの犯罪を裁くことができるのだが、不平等条約により領事裁判制度が認められているから日本が裁判を実施することはできない。まったく理不尽な不平等条約である。

万次郎と父島扇浦役人松浪権之丞は、経緯を説明し、フィッシャー米国領事に二名の犯人を手渡した。

(4) 思わぬ外交問題にまで発展

主犯のスミスは、禁固4か月及び日本国外への退去の刑が確定しており問題はなかった。共犯のホーツンに関して刑罰がこじれた。フィッシャー領事は、ホーツンが無罪であると強く主張した。また、プライン米国公使も事の真実よりも自国民の保護をなりふりかまわず優先した。「ホーツンが父島に財産や養育する家族がおり父島に帰還させることが妥当」とか、「それができないならば日本は賠償金をホーツンに支払うべき」「賠償金を支払えないなら我国(米国)艦隊を日本に派遣する」などと無茶ぶりをゴリ押ししてきた。万次郎等は幕府と連携し、これに対して一つ一つ証拠をあげながら冷静に反論した。ここで丁寧に証拠を集めたことが功を奏した。

結果、12月29日横浜の米国領事館にて米国プライン公使とフィッシャー領事、幕府側中濱万次郎・小花作之助らとの直接対決となった。ホーツン擁護の理論が万次郎の集めた状況証拠によって崩される。しまいには領事はホーツンが高齢であることを理由に無罪にしてもらいたいと主張した。万次郎は「人を殺そうと実弾入りのピストルを所持していたことは明らかな犯罪行為であり、法の下に高齢者であるか、ないかは関係ない」と言い切った。ここで議論は平行線をたどり政治決着することでこの場は収まった。

結局、日米双方の面子を立てて、補償金を見舞金の形で日本側がホーツンに支払うという形で政治決着した(元治元年〈1864〉4月29日)。幕府はホーツンに1000ドルの見舞金を支払い幕引きとなった。

この背景には、このホーツン事件が、英国との生麦事件の補償金のからみ、小笠原諸島の日本への帰属問題に発展することを幕府が警戒したからだと推測される。いずれにしてもそこに欧米列強の帝国主義が見え隠れし、直接的に植民地支配されることを幕府が警戒したのだろう。しかし、万次郎の正義に対する姿勢は、さすがである。

【編集後記】

今日(9月19日付け)の「高知新聞朝刊」21面記事に四万十市の不破八幡宮の「神様の結婚式」として知られる祭りが4年ぶりに開催されたことが掲載されました。コロナ禍や台風による中止で4年ぶりの祭り開催になるそうです。このような伝統行事が過疎化・少子高齢化により年を経ることに廃れていくように感じます。「よさこい四万十2023」と「不破八幡宮大祭」の二つの同時期の行事開催を複雑な気持ちで見つめる自分がいます。